

平和へ感謝と誓い

広島原爆の日

県遺族代表開さん 祈り父の分まで

「しらく悲しい思いを忘れず、平和のためにできることをしたい」。原爆投下から72年を迎えた6日、広島市の平和記念公園で開かれた平和記念式典に愛媛県の遺族代表として松山市空港通2丁目の主婦開明美さん(55)が出席。参列は初めてで、被爆した亡き父をしのぶとともに平和への誓いを新たにしました。(1面参照)



亡き父を思い、原爆死没者慰霊碑の前で手を合わせる開明美さん。6日午前9時ごろ、広島市

原爆投下時14歳で、広島市から南東の坂町で暮らしていた父の北野洋さんは、「とにかく地獄だった」と表現。詳細を語ることはほとんどなかった。

被爆した場所は明確ではないが投下直後は空一面をすごい雲が覆ったという。「恐らく友人か知人を市内に捜しに行ったのだと思います」。訪れた市内にあるのは死体だけ。子どもだったが、ハエがたかりうじがわく死体を学校のグラウンドに運び込んで

山積みにする作業を手伝った。三女の開さんが、原爆のことを尋ねても「幸せな時代に生まれたから分からないうしろね」と話だけ。それでも、戦争に関するテレビなどを見て「核兵器を持つてはいけない。戦争をしてはいけない。悲しい思いをするようなことはしてはいけない」とつぶやく父の姿を目にした。

開さんは「父が話さなかったのも、つらい思いをするのは自分たちで終わりにしたいという思いがあったのかな」と振り返る。北野さんは昨年5月に85歳で亡くなった。長年、坂町で暮らしていたが、体調を崩して開さんのいる松山市で入院。8月6日に広島で黙とうすることを励みに闘病生活を送ったが、かなうことはなかった。

開さんは「原爆死没者名簿に父の名前が今年記載されて奉納される。広島で黙とうする思いを果たせなかった父の分まで祈りたい」と参列を決めた。

72年前のように晴れ渡った青空の下、開さんは広島市の松井一実市長と遺族代表が名簿を原爆死没者慰霊碑に納める様子をじっと見つめた。碑の前で「安らかに眠りください」と献花し、静かに手を合わせて父に思いを寄せた。

松井市長の平和宣言などを聞き「平和を願う思いはみんな同じのはず。今日、感じた気持ちを忘れない」と幸せに生活できることに改めて感謝していた。(河端渉)